
色とイロという

かーばんくる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色とイロという

【Nコード】

N5007Z

【作者名】

かーばんくる

【あらすじ】

住んでいた村を焼き、初めての外界へと旅立つ主人公はじめてみるモノ、様々な人、それらの色を見て何を思うのか、何を感じるのか。

色をテーマにした小説です。

プロットもまったくありません。

それでも良ければどうぞ。

赤と青と蒼（前書き）

思いつきで書き始めた小説です（・・；）

それでも良かったらどうぞ

赤と青と蒼

見上げる空は果てしないほど蒼く、視線を前に向ければそこには青々とした海が広がっている。

綺麗だ。

それなのに何故なのだろうか、後ろに広がる色は赤い。炎の赤、血の赤、狂気の紅。

いつだったか、誰かが言っていたような気がする。ただ狂ってる。と、そう一言呟いていた。

あれは誰だっただろうか？ まあ、そんなことはどうでもいい。その誰かはいつの間にかいなくなっていたのだから。

それに、ここにはもう居る必要がなくなった。

一歩足を踏み出せば眼前に広がる海はどこまでも広く、見上げる空はどこまでも深く、振り返れば見える景色はどこまでも赤く。

そしてそれらを暖かな微笑みを浮かべる少年はまるで聖者のよう
で。

一歩足を踏み出せばそれだけ前の青は近づき背後の赤は遠のく。

二歩、三歩、と歩み続けければその分だけまた赤が遠のく。

四歩、五歩、と足音をならせば、背後からはその倍の速度の足音が聞こえた。

「待って」

背後から声を掛けられれば少年は歩みを止め振り返る。

「どうかしたの？」

微笑みを浮かべて振り返れば自らに声を掛けた相手、赤い色を背景に息を荒げ立つ少女に問い掛ける。

「……何で」

「何が？」

質問に質問で返す少年に少女は怒りに顔を真っ赤に染め上げ声を荒げる。

「何がって！ 何でこんなことを！」

「こんなこと？ それは村を焼いたこと？ それとも皆を殺そうとしたこと？」

「両方よ！」

何故目の前の少女は個々まで起こっているのだろうか？

少年は不思議でならなかった。

「村を焼いたのは君たちを殺そうと思ったからで、君たちを殺そうとしたのは邪魔だったからかな？」

「邪魔だったからって！ そんな事で！」

あれ？ そんな理由だったわけ？

「……ああ、ごめん間違えた。今の嘘だから忘れていいよ」

「なっ……！」

「ごめんごめん、理由だったね。村を焼いたのも、皆を殺そうとしたのも同じ理由なんだ」

「同じ、理由？」

「そう、同じ理由だよ。ここまで言えばもう分かるんじゃないかな？ ゆり」

その言葉を聞いて少女、ゆりは悔しそうにうつむけば、蚊の鳴くような声で呟いた。

「……じゃあ、あの時気にしてないって、そう言った事も嘘なの？」

「ああ、その言葉は本心だよ」

「だったら何で！」

ゆりは零れ落ちそうな程、目に涙を溜め、少年に掴みかかる。

「何で！ 気にしてないなら何でこんなことしたの！」

それも少年は微笑み続ける。

「そう、僕は気にしてないけど、それでもこの村とそこの住人は

遅かれ早かれ殺しておかないといけなかったんだよ」
遂には涙を零し嗚咽するゆりにやさしい声で少年は「だからね」
と続ける。

とん

少年に体を押されたゆりはバランスを崩し、数歩後ろに下がる。
信じられないと言った表情で少年を見つめるゆり。その背後から
炎に包まれた家がゆっくりとゆりに向って崩れてきていた。

「バイバイ、ゆりちゃん」

ゆりがその言葉の理解するよりも早く崩れ、倒れてきた家の木材
がゆりに降り注いでいた。

少年がそれに背を向け一歩を踏みだした時、ずんとひととき大きな
音が背後から聞こえた。

これでよし。

小さく呟き少年はまた歩き出す。

一歩足を踏み出せばそれだけ前の青は近づき背後の赤は遠のく。
二歩、三歩、と歩み続ければその分だけまた赤が遠のく。
四歩、五歩、と足音を鳴らせばそれだけ心が晴れていく。
六歩、七歩、と歩けば今度は何が変わるのだろうか。

少年は歩き続ける。一歩を踏み出すごとに感じる変化に喜びながら。

蒼を頭上に、赤を背後に、青を目前に。

いつしか赤は消える。なら今度は何がその色の変わりになるのだろうか？

小さく笑みを零し、少年は六歩目を踏み出した。

赤と青と蒼（後書き）

いかがでしたか？

感想やレビューなどをいただけるとありがたいです。
（ ^ ^ ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5007z/>

色とイロという

2011年12月16日23時45分発行